

笹川記念保健協力財団 日中交流事業  
中国医科大学盛京病院での胸部外科交流

千葉大学大学院医学研究院  
呼吸器病態外科学  
教授 吉野 一郎

私は2010年1月26日より1月30日の4泊5日にわたって（最初と最後は移動日）、中華人民共和国遼寧省瀋陽市にある中国医科大学盛京病院（第二病院）胸部外科にて「肺癌の外科治療」に関する講演および講義等による指導を行う経験をさせていただいた。私にとっては初めての中国訪問であり、折しも昨年より読み始めた司馬遼太郎の「坂の上の雲」の文庫本第6巻の後半、日露戦争の奉天開戦の箇所を読んでいたところで、成田発の南中華航空機内では「奉天へ」の章であった。奉天は現在の瀋陽である。約4時間のフライトの間、北朝鮮上空付近では機内の窓を閉じるように言われ現実に戻った。空港には中国医科大学国際交流処の王さんが日本語で出迎えてくれた。零下10度の刺すような風が吹いていたが、すぐに車に乗せられハイウェイを瀋陽市内に向かうと、経済成長が目覚ましい中国の東北地方1番の大都市（人口700万人超）ならではの光景が目飛び込んできた。近代的な高層ビルが幾重にも立ち並び、市の入り口には巨大なスクリーンで電化製品などの広告を映し出していた。



市内の道路は殆どが片側4-5車線と非常に大きく、大量の車が往来していた。韓国製が最も多いようであったが、車種は豊富で日本、ドイツ、米国の車も多かったが国産車は目立たなかった。どこの往来も人が多かったが街の作りのほうが大きいためか雑踏というほどの街路は目立たなかった。断続的な積雪のため、道路は泥濘が多く、お世辞にも綺麗な街並みとは言えなかった。市の中心には毛沢東の巨大な石像があり、その前の広場では寒さにも負けず若者が集団でダンスの練習をしていた。日本による満州経営時代の建築物なども見ることができた。



滞在したホテルは Intercontinental Hotel 瀋陽という一流ホテルで、通りを隔てて中国医科大学（+附属第一病院）の目の前に立地していた。部屋は19階にあったが、新築の中国医科大学のビルはそれよりも高く、夜はネオンが煌々とついていて高層ビルの多い周りを見渡してみても威容を誇っていた。中国医科大学は一学年約1000人の学生を教育し、複数（第4まで確認）の附属病院を有する中国でも第二の規模の医科大学ということで、日本の大学医学部とは比較できないスケールであることに驚かされた。また歴史上、帝国主義時代の日本の影響を受けた経緯より日本語教育クラスを有しており、滞在中、日本語が堪能な医師を数多く見受けた。私をエスコートしてくれた谷文升教授もその一人であった。谷先生は15年ほど前に千葉大呼吸器外科に1年間留学しており、千葉大の話しをすると非常に懐かしそうにされていた。附属第二病院である盛京病院は本学より車で20分ほど離れたところにある23階建ての近代的な病院で、最近増築されて3,000床となり、第一病院より大きくなったとのことである。威風堂々としたマンモス病院である。広々とした外来では、1日に8,000名が受診するという。手術室は28室（1ヶ月の手術件数は2,600件）で、呼吸



器外科手術だけで年間 800 例以上の手術が行われているという。

まず初日に病棟の回診をさせていただいた。3 人部屋を基本として、手術後の患者を診る観察室として 15 床の大きな部屋が一つあった。日本で言うところのナースステーションには多くのコンピューター端末が設置されており、各患者の画像や血液データなどを診ることができ、一部電子カルテ化されているようであった。肺癌診療においては CT, MR, PET などの画像診断は日本と同レベルであったが、気管支鏡診断は一般的ではないようであった。よく術前診断に関するディスカッションを求められたが、この点、議論がかみ合わないことがあったように思う。また多くの患者の家族が付き添っており、廊下は彼らで混雑していた。また禁煙、分煙の観念が乏しく、廊下で喫煙する家族（患者？）をよく見かけた。手術室を見学させていただいたが、手術に用いている器具は日本と同様であったが、ディスプレイの自動縫合器の種類は在庫が少なく、また患者負担となる保険制度のため、その使用がかなり制限されているようであった。内視鏡手術の普及が遅れている原因ではなかろうか？



二日目は午前中に胸部外科の若手研究者と研究についてディスカッションする機会をいただいた。修士過程と博士課程の大学院生が各 3-4 名おり、研究内容について説明してもらった。本学の病理学や薬理学教室など基礎の教室で研究指導してもらっている者が 3 名ほどいたが、他は自分で研究テーマを探して研究しているようだったが、専門的な指導は受けていないとのことであった。千葉大学呼吸器外科の大学院生の現状を説明すると、「指導体制がしっかりしていてうらやましい」、との感想であった。病理学教室で研究している方の課

題は「気管の再生」で、蛍光顕微鏡や電子顕微鏡の興味深いデータを紹介していただいた。午後は、中国医科大学の旧校舎を案内してもらった。日露戦争後に日本が建てた建物は、以前は上空から見ると「日本」に見えたそうであるが、現在は改築されて「日」だけが残っており、その中を見せてもらった。かなり古い建物であったが、今も幾つかの研究室が入っているようだった。その後、市内観光として清朝三代目までの都が置かれた故宮（瀋陽市内）を見学させてもらった。雪が舞う零下 20 度の酷寒の中ではあったが、ヌルハチ時代の貴重な文化に大いに感銘を受けた。

三日目は瀋陽市胸部外科協会会議に出席し、数演題の基調講演を聴かせていただいた。会場は盛京病院の会議場で、非常に洗練されていて、手前には盛京病院の歴史を供覧する展示物もあった。講演で興味深かったのは弁護士による医療訴訟の現状に関するもので、中国語のため細かいことは理解できなかったが、現在、中国人民の医療に対する不満はすさまじく、医療訴訟は年々エスカレートしているとのことであった。合併症死などが生じると患者家族は一族をあげて抗議し、病院の目の前で葬儀をしたりする様がスライドで紹介されていた。これに対し、胸部外科医師は団結して医師の立場を守っていこう、という主張が司会やフロアから出されていた。私は特別講演として、肺癌外科医療における EBM の考え方、胸腔鏡による肺癌根治術などについて話した。特に「末梢小型肺癌に対する胸腔鏡下区域切除」について関心を寄せる先生が多く、先進的な技術を学ぼうとする姿勢がうかがわれた。夕方の懇親会の席では、日本に滞在した経験のある先生方から気さくに話しかけてもらい、楽しく語らうことができた。



滞在中、昼食と夕食のほとんどは谷教授と王さんにお世話になった。日本では味わうことのできない本場の中華料理（東北料理）も堪能したが、アヒルの舌が一皿に山盛りでビールつまみとして出された時には少々あせった。

最終日にはお二方に空港まで見送ってもらい、「再見」を誓い合い、帰路に着いた。

このような貴重な体験をさせていただいた笹川記念保健協力財団と中国医科大学盛京病院胸部外科の先生方に厚く御礼申し上げます。

以上  
(2010年2月23日)